

エイズ治療拠点病院医療従事者 海外実地研修報告書

1 研修参加者

所属病院名 : 広島大学病院
職名 : 薬剤師
氏名 : 石井 聡一郎

2 研修日程 : 2017年11月25日(土)~12月10日(日) 移動日含む

3 研修の内容

11/25 (土) サンフランシスコ着

- ・小林まさみ氏、Mr. Davidと顔合わせ

11/26 (日) 休み

11/27 (月) AM 小林まさみ氏によるオリエンテーション

- ・プログラムの説明、日誌、最終プレゼンテーションのテーマについて

11/27 (月) PM UCSFにてDr. Feldmanによる講義

- ・UCSFの紹介
- ・総合内科診療所の見学 (プライマリケア)

11/28 (火) Highland Hospitalの見学、PharmDのYolandaさんの仕事を見学

- ・臨床薬剤師について
- ・薬剤師面談への同席

→患者のアドヒアランスを確認するためにわざと用法を言い間違え、患者に指摘させるなどの工夫をしていた。患者とのRelationshipが何よりも大切とのことであった。

- ・主要レジメンについて

→GEN、DTG+DVYの2つがメイン。アドヒアランスの悪い患者にはPIを使用とのこと。

- ・大学院生との対話

→アメリカと日本における薬学教育の違いについて学ぶことができた。アメリカにおける薬剤師の立ち位置について知ることができた。

11/29 (水) AM カストロ地区のHoward先生の自宅にて講義

→Q&A形式にて質問に答えていただいた。

11/29 (水) PM UCSFにてFeldman先生による講義

- ・アメリカ、サンフランシスコにおけるHIVの疫学

11/30 (木) AM 消化器内科Somsouk先生による青空教室

- ・HIV患者での消化器における問題

→AIDS発症する人は少ないとのこと。早めに検査で発覚することが分かった。

11/30 (木) PM SFGHの薬局見学、Mission Neighborhood Health ClinicにてNeal先生による講義

- ・ERのサテライト薬局見学

→センター全体で50~60人の薬剤師、70~80人のテクニシャンがいる。Omniceil Pharmacy Carousel

というシステムを用いて調剤

- ・Mission地区でのアドヒアランスの高さ
- ・チーム医療について

11/30（木）夜 Terra Gallery

- ・Clinica Ezperanza's Masks Exhibition

→ゲイの人たちが作製したマスク展示を行っており、作品を創ることで自身の気持ちを客観的に見る事が可能となるアートセラピーについて学ぶことができた。

12/1（金）AM カストロ地区でWalgreenの見学

- ・24時間営業で1日に700人がHIVの薬を受け取りに来る。（ART、PrEP）

12/1（金）PM Tom Waddell Health CenterにてZevin先生の講義

- ・トランスジェンダーのHIV治療について

→予約なしで受診できるようにし、Barriersを下げることでコンプライアンスが高まっている

12/1（金）夜 グレース大聖堂での国際エイズデーのイベント

・ゲイの人たちのコーラスやHIV感染者の演説等を聴き心が揺さぶられた。メモリアルキルトも飾っており、荘厳な雰囲気であった。

12/2（土）休み

12/3（日）休み

12/4（月）AM SFGHにて院内薬局等を見学

→院内薬局と院外薬局は分けてあったり、調剤はボトルで行っているなど日本との違いに驚いた。

12/4（月）PM カストロ地区にてHIVの迅速検査やパネルディスカッションの見学

・HIVの迅速検査を行う専用車が毎週きておりその場で検査を行うことができる。日本では見たことのない光景であった。

12/5（火）AM SFGHにて呼吸器内科Huang先生の講義、診療所見学

- ・HIV患者における呼吸器疾患
- ・PHASTチームによりARTをHIV陽性判明即日開始できるよう調節

12/5（火）UCSFにてソーシャルワーカーのDanaさんの講義

- ・血友病の患者やHIV患者に対するソーシャルワーカーの役割

12/6（水）AM 薬物乱用の勉強会、SFGHのPharmDのJanetさんの仕事を見学

・外来に常駐している薬剤師の仕事ぶりを見せていただき、薬物療法の責任者としての自覚や、保険制度まで理解していることに感銘を受けた。

- ・バブルパックを使用するなどしてコンプライアンスを高めている。
- ・HCVの治験等も行っている。

12/6（水）PM API Wellness CenterにてLin先生による講義、SFGHにてJanetさんによる講義

- ・SFにおけるアジア人のHIVの歴史と治療について

→すべての人を包み込んでくれるような先生の人柄に惹き込まれた。

- ・抗HIV薬の薬物動態や相互作用について

→薬剤師の強みとして薬物動態や相互作用について知っておくことが大事であることを再認識できた。

12/7（木）AM ホテルにて“*And the Band Played On*”というDVDの鑑賞

→HIVが蔓延していった歴史やHIVと闘ってきた研究者等の働きについて学んだ。

12/7（木）夜 Feldman先生の自宅にて修了式

12/8（金）AM Final Presentations

・それぞれのPresentationを聴き総復習できた。私は「HIVチームにおける薬剤師の働き」について発表を行った。

4 研修の成果・感想

今回の研修を通して、アメリカにおけるHIVの実情について学ぶことができました。様々な先生から話を伺うことができましたが、どの先生も愛情にあふれていて医療従事者として人と人との関係づくりの大切さを改めて感じることができました。また、アメリカに2週間滞在したことで日本との文化の違いについても体感することができ、本当に貴重な経験となりました。

私はこの研修に参加するにあたってあるテーマを持って臨みました。病院にてチームカンファレンスに参加したり、患者さんと面談することもあります。アメリカのHIV診療チームにおいて薬剤師がどのような働きをしているのかを学びたいと思っていました。事前に小林まきみ氏に連絡をし、薬剤師の話聞く機会も多く作っていただきました。

会うことのできたHIV診療に携わっている薬剤師に共通して聞くことができたのは、どの薬剤師も患者とのRelationshipを大切にしているとのことでした。これは薬剤師にかかわらずすべての職種に言えることですが、HIV患者は今のところ一生薬を飲み続けることが必要です。そのためには定期的な受診が必要となります。そんな中で受診を中断してしまったり、服薬をやめてしまうと一度抑えることができていたウイルスがまた増えてしまい、AIDSを発症することも考えられます。そのため、どの診療所でもこの医療従事者に会いたいと思ってもらえる人を一人は作るようにしているという話を聞くことができました。特にHighland Hospitalの薬剤師は患者との関係づくりがうまいとのこと引き抜かれたとのことであり、コミュニケーションスキルが一つの大きな採用ポイントとなっていることに驚きました。

薬剤師の役割としてはアメリカの薬剤師教育の違いから日本との違いを感じることができました。アメリカで臨床薬剤師と働くためには4年の総合大学を出た後、薬学大学院へ4年通うことによって薬剤師の資格を取り、さらに1年の臨床薬剤師としての勉強・実習と9年必要とのことでした。さらにHIV等の専門性を持つためにはもう1年の勉強が必要とのこと、日本と比べてもより薬剤に関する専門性を持っている印象でした。そのため、医師も薬のことは薬剤師に任せており、たくさんで場面で薬の選択や相互作用など頼っている様子でした。日本でも病棟に薬剤師が常駐するようになり、以前と比べると求められる知識もより深くなっています。教育の違いはあれど求められるスキルは同様であるために、薬剤師として働きだしてからの知識の習得はアメリカの薬剤師よりも一生懸命に取り組まなければいけないと感じました。ただ日本でも薬剤師が行っている業務はアメリカのそれと比べても劣っているわけではないことも同時に認識できました。日本に帰国後も現在の方向性を継続し、より自己研鑽を行うことでアメリカでいう臨床薬剤師に負けない仕事が可能と思いました。

また驚いたこととしてはサンフランシスコにおけるHIV患者への補助の多さ、啓発の多さ、PrEPの浸透具合です。HIV陽性が判明したその日からARTを開始できるため、自身が感染を受け止め

る前から薬が始まる方もいることでしょう。そんな中でチームとしてその時点から介入することで感染者の心のフォローも充実していました。また、無料で薬剤を継続できることがほとんどでありHIVと闘ってきた過去があるために保険制度も整っていると感じました。

啓発活動についても街中を走っているバスの中にもLGBTQのポスターが貼ってあったり駅にも啓発ポスターがあるなど日本ではなかなかない取り組みもされています。またアウトリーチの活動も行っているようでありHIVという言葉に触れる回数も日本より多く、LGBTQの方への理解も広がっていることが感染者が住みやすい環境が整っていることにつながっていると感じました。このような活動が日本でも広がるように啓発活動を行っていきたいと思いました。

PrEPは無料で行う（保険で賄う）ことができ、多くの医療機関で行われているとのことでした。ただし、むやみやたらに行うのではなく、3ヵ月ごとの検査が必ず必要であったりとSTDが増えないような工夫もありました。日本においては予防効能はなかなか認められることは難しく、アメリカと比べるとHIVの新規感染者も多くないことからPrEPが広がるにはかなりの時間と労力が必要かもしれませんが、大いに参考になるシステムがアメリカにはあると感じました。

全体の研修を通してHIVに関する知識も多く得ることができましたが、何よりも患者さんに向き合う姿勢というところに大きな感銘を受けました。患者さんとのコミュニケーションについては大切にしているつもりでしたが、どの先生も慈愛の心にあふれておりnon-judgementの気持ちを持って診療していました。今後患者さんと向き合う中でこの気持ちを大切にしていきたいと心を新たにしました。

最後に本研修に参加する機会を与えていただいた公益財団法人エイズ予防財団の担当者様、Feldman先生をはじめとする先生方、そして2週間にわたって研修だけでなく生活についても数えきれないほどのサポートをしていただいたまさみさん（小林まさみ氏）、デイブ（David Wiesner氏）に大変感謝いたします。ありがとうございました。